

見えない男（最終調整稿）

作・演出 萬野 展

登場人物

- 木村常一郎 九十五歳の痴呆老人。（神門駿）
- 月島茂 九十五歳の痴呆老人。月島・愛の里の経営者。（萬野展）
- 小田島麻紀子 一家惨殺事件の生き残り。（菅澤和香子）
- 秋野江利子 岩津コピーライター事務所に勤めるアルバイト。（石田愛）
- 新田恭子 愛の里看護人（青木千恵）
- 吉沢まなみ 絵が趣味の大学生。（大石紗綾香）
- 佐竹潔 ボランティア青年。（斉藤邦男）
- 和泉孝 月村の遠い親戚。（櫻井俊輔）
- 飯田周平 迷宮入りした事件を追う退職刑事。（早矢仕裕之）
- 藤沢和紀 ボランティア青年。（村上佳久）
- ニワトリ男 （櫻井俊輔）
- 宣子 （菅澤和香子）
- 八百球ノ床屋 （早矢仕裕之）
- 町内会長 （桜井俊輔）

ACT 1

部屋の中。
老人たちの足が見えている。
上半身はカーテンに隠れて見えない。
女（小田島麻紀子）が花を花瓶に花を生けている。
やがて女はカーテンの中に入る。
女の足が、老人たちの間を歩き来する。

外。（客席前）
女（秋野江利子）登場。携帯電話を片手に話をしている。

秋野 …… はいはい、はい。はい。はい。え？ はい。はい。着きました。えーと、月島・愛の里。はい。愛の里です。間違いないです。ええ、三階建てのビルですね。かなり古いです。はい。ここに木村常一郎さんがいるんですね？ え？ さあ…っで、そんな無責任な。いるんですね？ え、たぶん。たぶんいるはず。…はあ。じゃあとにかくええ、はい、確認します。それでは、報告終わります。切ります。…切りますよ。切ります…あ。（切れている）

秋野、看板を確認する。かなり強い胡散臭さに思わず独言する。

秋野 愛の里…。

ボロボロのビルを見上げている。やがて意を決してビルに入る（退場）

部屋の中。
女がカーテンから出てくる。
去ろうとしてふと、人の気配に気づく。

小田島 …… 誰がいるの？

小田島 …… 新田さん？

答えはない。
小田島、気のせいと知って、去ろうとする。
そこへ秋野登場。

秋野 あ。

小田島 ……。

秋野 突然恐れ入ります。あの、受付と思われるところが無人でしたので、あの、すいません、入ってきてしまいました。

小田島 ……（曖昧に頷く）

秋野 あの、ワタクシ、（あたふたと名刺を出そうとしながら）秋野と申しまして、あの、あれ？ あの、こちらに木村常一郎さんという方がいらっしゃるといふことで、訪ねて参ったわけでした、その…

小田島 ああ、はい。

秋野 いらっしゃるんですね？ やっぱり。あ、よかった。よかったです。

小田島 木村さんなら…そこに。

秋野 あ。え？ あ。

秋野、カーテンの方を見る。足が見えている。
小田島、会釈して退場していく。

小田島 ごゆっくり。

秋野 あ、あ。ちよっと、もしもし。

小田島退場。

秋野、ひとりになる。カーテンの向こうを気にする。

秋野 …あの、すみません。たいへんぶしつけとは存じますが、あの、わたくしは秋野と申しまして、木村常一郎さんという方を訪ねてまいりました。あの…ええと、それと言うのもたいへん込み入った事情がありまして、木村常一郎さんにですね、わたくしお話ししたいことがありまして、ええ、あの、このカーテンはめくってもいいカーテンでしょうか？

カーテンの向こうは沈黙している。

秋野 …えーと、あの、事情と申しますのはですね、あの、木村常一郎さんと言う方は明治四十三年生まれで、ご存命であれば九十五歳というたいへんな高齢ということですので、ええ、あの、もしここに木村常一郎さんご本人がいらっしゃるようであればありますれば、わたくし、ぜひわたくし、お伝えしたいことがございます。あの…。…木村さん？

カーテンの向こうからうめき声のようになり声のような声が聞こえる。

秋野 …。

秋野 き、木村…さん。

声。

秋野 あ、それは、木村さんがいる、という解釈でよろしいのでしょうか。

沈黙。

秋野 木村さん。

声。

秋野 木村さんがここにいる。

声。

秋野 木村さんはここにはいない。

声。

秋野 このカーテンはめくってもいいカーテンである。

声。騒ぎがおおきくなる。

「助けてくれ」「助けてくれ」という悲鳴。奇妙な笑い声。

秋野 あっ。あのどつかあの、おち、落ち着いて。すいません、もうカーテンのことは聞きませんから。あっ。

カーテンぎりぎりに立ったふたりの老人のシルエットが見える。

老人声（月島） ……誰じゃあ…。

秋野 ……あ、秋野と申します。

老人声（月島） その男は誰じゃ…！

老人声（木村） ……（笑い声を立て続けている。）

秋野 おと、男？

老人声（月島） 来るな…来るなあああ…

老人声（木村） ……（笑い声を立て続けている。）

カーテンの隙間から細い皺だらけの腕がニユッと伸び、
まっすぐに客席方向を指さす。

秋野、息を呑んで、そちらを見る。

秋野 誰、誰か…いる…の？…

沈黙。老人の腕がさっと引込む。

女（新田恭子）登場。

新田 なにしてるんです！

秋野 ひいっ！

新田 なにしてるんですか、ここに。

秋野 あ、あ、あの…。こここちらの方でしょうか？ すみません勝手に入ってしまったて…

新田 あなたは？

秋野 あの、あ、秋野と申します。（名刺を渡す）

新田 岩津コピーライター事務所。秋野江利子…。…コピーライター？

秋野 はい、そうです。決して怪しいものではありません。わけあって木村常一郎さんを探しております。

新田 木村さんを…

秋野 はい。

新田 木村さんをご存じなんですか、あなた。

秋野 いえまあ、ご存じというか…

新田 ちよっと、ちよっと待ってくださいね！

新田、カーテンを引く。

二脚の椅子に呆けた老人ふたりが座っている。

秋野 ……

新田 どっちです？

秋野 は？

新田 どっちが木村さんなんです？

秋野 ……さあ。

新田 だってあなた木村さんを知ってるんじゃないの？

秋野 いえあの、顔までは…。

新田 ……やっぱりわからないんですね…。

秋野 は？

新田 わからないんですよ。

秋野 …。

新田、老人たちの体を拭き始める。

新田 どちらかが木村さんなのは間違いないんです。でも、わからないんです。

秋野 あの…失礼ですけど、あなたは…？

新田 …ここでふたりの世話をしています。新田恭子と言います。

秋野 ああ、この職員さんなんですか？

新田 ずっとじゃありませんよ。朝昼晩のお食事と下の世話、一週間に一度体を拭いて…それだけです。ここはもともと正式な老人ホームでもないし…私も資格があつてやつてるんわけじゃないから…。

秋野 あ、そうなんですか。…あの、わからないというのは、どういう…

新田 文字通りわからないっていうことですよ。

秋野 …いや、でも…

新田 …もうボケちゃってるでしょう。わたしがここに来たときからそうでした。話しかけても、名前を聞いても…（秋野を見て首を横に振る。）

秋野 でも、近所に知っている人が…

新田 いないんです。ふたりがここに住むようになってから、ほとんど外に出てなかったみたいでね。

秋野 え、でも…ほら買い物とか…

新田 ずっとふたりの世話をした女の人がいて、身の回りのことをぜんぶやってたそうです。

秋野 え、え、ちよつと待ってください。じゃあ、えーと、じゃあまず、このどちらかが木村さんとして、…もつひよりは誰なんですか？

新田 あら、それは決まってるじゃない。

秋野 決まってる？

新田 表に今でもプレートが出てるでしょう？ 読みませんでした？

秋野 …あ。愛の里…

新田 ええ。月島・愛の里。（老人たちを見て）ここを作った人。月島茂さんよ。

秋野 ここを作った人…。

老人（月島）、急に立ち上がって、声をあげる。

老人（木村）、また笑いはじめる。

老人（月島） 誰じゃ…誰じゃあ！ あつち行けつ！ おまえに、おまえなんかに！

新田 ああ、ほら、ダメよそんなに興奮しちゃ。ほら、誰もいないから、ね。

老人をなだめる新田。

老人たち大人しくなり、新田が持参した食べ物を食べ始める。

秋野 誰のこと言ってるんでしょうか。

新田 （さあ、という風に肩を竦め）いつもなのよ。いつもあつちに回かってまるで誰かがいるみたいに話しかけたり喚いたり。

秋野 …。

新田 どうかしました？

秋野 いえあの…いや気のせいですかね。実は私もさつき…誰かそつちにいたようがないような…

新田 いやだ、ちょっと、怖いと言わないでよ。それでなくてもこのビル、静かすぎて気持ち悪いんだから。

秋野 あ、どうも、すみません。気のせいです、気のせい。きつと。…それであの、話は戻りますけども、つまり、えー、どういふことなんでしょ。

新田 …私が三年前にここに来たとき、もうふたりは自分が誰かもここがどこなのかもわからない状態だった。どっちの名前を呼んでも反応がなくて、持ち物なんかもふたりぶんがひとまとめにされてて、ふたりを判別する手段は、なにひとつなかった。

秋野 はあ…。そんなことが、あの、起こり得るんでしょっか。

新田 最初は私もね、そんなバカなことがあって思ったわ。でもそうなの。考えてみて秋野さん。もしあなたを知っている人がみんな死んでしまって、あなたが自分の名前を忘れてしまったら、あなたが秋野さんであることがどうやって他人にわかるかしら？

秋野 …。でもあの、こういう状態になる前というか…その、おボケになってしまいう前におふたりを知ってらっしゃった方がいれば、わかるんじゃないですかね？

新田 ふたりがここに住み始めたのはもう二十年も前でその頃はまだふたりともボケてはいなかったそうです。でも近所の人たちは、いつのまにかお爺さんがふたり住みついてるといふことしか知らなかった…。

秋野 二十年。そんなに長いこと住んでいて、まわりの人は誰も知らないんですか？誰ひとり？

新田 あなたはわかります？ 自分のうちのまわりに誰が住んでいるのか。顔と名前が一致する人が何人いるかしら？

秋野 …。

新田 あたしは自信ないわ。

秋野 …確かに…。あの、新田さん。さきほどからお話を伺っているとですね、このおふたりのことを、誰かから聞いたようなおっしゃりかたですけども、あの、そういう情報はいつたい誰から…

新田 …手紙です。

秋野 手紙。それは誰からの。

新田 さっき言ったでしょ？ ずっとここでふたりの世話をしていた女の人がいたって。

秋野 はい。

新田 新田宣子。三年前に亡くなった、私の祖母です。

秋野 はあ、お婆さまが…

新田、時計を見て

新田 秋野さん、私これから仕事なの。(カーテンを閉める)

秋野 あ、はい。申し訳ありませんお時間とらせてしまって…。

新田 夕方六時過ぎにもう一度くるから、もしよかったら…。

秋野 はい、是非、あの、もう少し詳しくお話を聞かせていただければ。はい。

新田 じゃあ、鍵かけますから。

秋野 はい。

新田、先に退場。
秋野、足だけ見えている老人にしばし目をやり、追って退場。

外、別の場所。
商店街の旦那風の男登場。

床屋 あー…月島ビルねえ…

秋野、追って登場。

秋野 はい。

床屋 うん、知ってるよ。

秋野 そこにですね、あの一大変ご高齢のお年寄りがですね…

床屋 ああ住んでるね。

秋野 あっ、ご存じで。よろしければそのお年寄りについてご存じのことをですね、

あの…

床屋 あんた、ちよつと前髪長いなあ。

秋野 えっ。

床屋 その前髪。

秋野 いや、え、そ、そうですか？

床屋 長いね。

秋野 そ、そうかな。そうかも。

床屋 ちよつとここ座んな。

秋野 いや、しかし、あの、

床屋 話聞きたいんだろ？ ホラ、顎。

秋野 …あ。はい。

床屋 （シュシュシュ）まあなんだよ、このあたりもな、めっきり人口も減っちゃって、見てわかるだろ、商店街もサビれちゃってなあ。不景気でかなわないよ、まったく。

秋野 はあ。

床屋 うちだよ、自慢じゃないけども三二十年もここで代々床屋やってんだよ。老舗だよ老舗。（チヨキチヨキチヨキ）

秋野 なるほど。あっ、そこはそんなに…

床屋 いいからじっとしてる。あんた、月島の爺さんたちのこと聞きたいんだろ？

秋野 は、はい。

床屋 三十年前っていやああんた、昭和五十年だ。あんた生まれてたか？ ん？

秋野 いや、ええ、まあギリギリ…

床屋 俺はまだ小学生だったがな、その頃はこのあたりも賑やかだな。毎週日曜日は店は行列だよ。その頃はあんた、男の子は刈り上げ、女の子はおかつぱって相場が決まってるな。（チヨキチヨキチヨキ）

秋野 えっ、おかつぱ…あ、そ、そこは…

床屋 いいから任せとけて。でな、あれは俺が家を出て虎ノ門の専門学校行ってるときだったから…そうそう、昭和六十年だよ。オヤジが手が足りねえから月イチで帰ってこいっていつんだよ。

秋野 はあ。

床屋 事情を聞いてみたら、月島の幽霊ビルに年寄りかふたり住みついたって言うんだな。

秋野 幽霊ビル…

床屋 ところがその爺さんたちがまた変わりモンでな。なにせ外にゃ出てこないし、まるで人目を避けるみたいになっさりと住んでたよ。

秋野 近所づきあいとかは…

床屋 なかつたんじゃないかね。ところがホレ、人間放つときゃ髭も頭も伸びるだろうが。そこでウチが毎月一回出張サービスを承ったってわけだ。（チョキン）

秋野 ははあ。え、じゃあ、あの、ご主人が、あのビルに？

床屋 いやあ、行つてたのはオヤジの方だ。俺はその間店の手伝いで呼び戻されたってわけだよ。

秋野 その頃はふたりはまだボケては？

床屋 全然。すっかりしたもんだつたらしいよ。

秋野 じゃあ、じゃあ、あの、どっちが木村さんでどっちが月島さんか！

床屋 おい、危ない、いきなり立つなよアンタ…。

秋野 お父様ならおわかりになりますか！

床屋 ああ、オヤジならわかつたろうなあ。たぶんな。

秋野 …あの、失礼ですが…お父様は…

床屋 （手を横に振る）もう五年前にな、くも膜下。

秋野 そうですか…。出張サービス自体は、ご主人が引き継がれたわけですか。

床屋 いや。俺が家に戻つて来た頃にはもうやめてたな。そうだ、その時にもうホレ、もうひとり婆さんが来てて、身の回りの世話全部やってたよ。

秋野 宣子さんですね…。

床屋 あの婆さん宣子つてのか。そついや最近見ないなあ。

秋野 お亡くなりになつたそついです、三年前に。

床屋 あそつ。へえー。

秋野 あの、お父様が月島ビルに出張されてた当時、他にあのビルに出入りしてた方がいなかったでしようか。

床屋 さあ…。ああ、そついや当時町内会の会長が、心配してよく出入りしてたよつな…。

秋野 どうもありがとつございました！

床屋 あ、おい。頭まだ途中だよそれ。ちよつとアンタ！

秋野、退場

町内会長登場

秋野、前髪を気にしながら登場

会長 あのね、だからね、僕忙しいの。建設会社の説明会行かなきゃいけないの。

秋野 あの、そこをなんとかほんの二、三分だけでも…

会長 もう！

秋野 あの…ホントにその…町内会の…会長さん、なんですよね？

会長 そつ。会長。

秋野 ずいぶんその、お若いんですね。

会長 若いと会長やっちゃいけないわけ？

秋野 いやいや、そついうわけでは…。

会長 うちはね、昔からずっと会長やってんの。そついう家柄なの。デフォルト会長なの。

秋野 はあ。

会長 なんなの、聞きたいことは。早くして。僕忙しいの。ラクロスの試合があるんだから。

秋野 え、説明会じゃないんですか。

会長 …（予定を確認する）だから予定がつかまってんの。僕は町内会長だし学校の友達とつきあいもあるし、若いから遊ばないといけないし、

秋野 あ、そ、そうですね。

会長 大変なのっ。ねっ。それを言ってるのよ！

秋野 は、はいっ。

会長 早くしてっ、早くっ。

秋野 はいっはいっ。あのですから月島ビルに住んでいるふたりのお年寄り…

会長 （資料を見て）月島茂一九一年生まれ、無職、月島ビル所有者。木村第一郎同じく一九一年生まれ、無職。両名とも一九九一年転入手続き済み。町内会費未納なし。これでいい？

秋野 うわあ。すごいですね！

会長 当然よ当然。僕はね、この町内に住んでる人のことは全部わかってるの。それが会長つてもんなの。

秋野 じゃあ、じゃあ、あの、顔は…

会長 は？ なに？

秋野 どっちが木村さんでどっちが月島さんかというのは…

会長 あなたね、僕をバカにしてる？

秋野 い、いえ、決して。

会長 してるでしょ。してるね。そんなの、そんなことはねえ、

秋野 はい。

会長 本人に聞けばすぐわかるでしょ。すぐわかることはわざわざ僕がわかってる必要ないでしょ。それを言ってるのよ！

秋野 はあ…。それがわからないのでこうしてお伺いしてるんですが…

会長 だから本人に聞けばわかるでしょ！

秋野 あの、会長さんはおふたりに会ったことは…

会長 僕が？ 爺さんたちに？ 僕？ 会ってどうするの？

秋野 あ、いや、もういいです。

会長 もういいの？ ホントにいいのね？

秋野 あの、転入手続き済みっていうことは、住民票はこの町にあるんですね？

会長 あるの。なかつたら町民じゃないでしょ。それだつたら僕が知ってる必要ないでしょ。

秋野 一九九一年…ええつと昭和の…

会長 平成よ。平成二年。

秋野 でもふたりがこの町に来たのは二十年前の昭和六十年だと聞いたんですが。

会長 だから？ なに？ とにかく転入届は平成二年なの。これは間違いないの。役所の記録がそうなってるんだから。

秋野 なんて五年ブランクが…

会長 だ・か・ら、そんなことはねえ！

秋野 知らないんですよね、はい、すみません。

会長 待ってたからだよ。

秋野 はっ？

会長 （ため息ひとつ。そして静かに）これは僕が生まれる前の年の話ね。その当時町内会の会長だった僕のおじいちゃんね、毎日のように月島ビルに通っていたわけ。六十歳を過ぎてたおじいちゃんより、どう見ても十歳は年上の、老人のふたり暮らしでしょ。なにかあったらどうするか？ 寂しくはないか？ 身の回りの世話は？ お金は？…ね？ 突然この町の住民になったそのふたりのことが、おじいちゃんは、心配だったんです。

秋野 …ええ。

会長 最初はまったく口をきいてもらえなかった。でも少しずつ、ふたりの事が分かってきた。最初は名前だけ、それから、ふたりがこの町に来た目的…目的？

会長 うん。あのふたりはね、あのビルで誰かを待ってたの。そのためにあそこに住んでいたの。

秋野 …誰を？

会長 はつきりとはわからないんです。でもね、ふたりがあこのビルに来てから五年後に女の人がやってきて、ふたりの世話をし始めた。住民票が移されたのもその時。その女の人が全部手続きをしたんだね。

秋野 じゃあ…待っていたのは…

会長 その人だったのかもしれない。

秋野 お爺さまは、その女の人は…

会長 よく知らないと思います。ちょうどバブルがはじけた後でね、この町でもいろんな店が倒産したり、一家心中事件があったり、ひどいもんだったらしくて…いっしかお爺ちゃんも月島ビルには通わなくなってしまったんです。

秋野 なるほど…。

会長 …こついうことはね、全部お爺ちゃんの日記に書いてあったの。

秋野 あの…失礼ですが、お爺さまは…

会長 八年前に死んじゃった。ヘルニアが悪化して、最後の何年間かは寝たきりだったけどね。

秋野 …そつですか。

秋野 あの、もしお差し支えなければ、その、お爺さまの日記というのを、拝見できませんでしょうか。

会長 …。

秋野 お願いします。

秋野 深くと頭を下げる。

会長 いいですよ。今日はちょっと忙しいから、後日また改めて連絡もらえる？

秋野 かしこまりました。

会長 じゃあね。

もう一度頭を下げる秋野。
会長、手を振って退場。
残った秋野、携帯電話を出してかける。

秋野 …。あ、もしも…。(留守電だった)…。えー。夕暮れが迫ってまいりました。あ、秋野です。状況はですね、あの、よくわかりません。難しい状況です。木村さんはずね、確かにあのビルにいらっしやっただんですが、あの、もうひとりお爺さんがいまして、どっちが木村さんかわからないという…あの、たぶんこの説明ではわからないと思いますので、この件はまた後ほどということ…あの、いちおうあと愛の里の新田恭子さんの話の続きを聞くという作業が残っているのですが、これ以上仕事すると時間外になってしまうのでどうしたものか…あ。(留守電が終わった)…。

秋野、時計を見て迷うが、意を決する。

場は愛の里ビル内に。

カーテンは閉じられ、老人の足が見えている。
カーテンの中から、からの食器を持った新田登場。

新田 やつと食べてくれたわ。

秋野 申し訳ありません。お忙しいのに。

新田 もう慣れてますから。…じゃあいろいろ聞いてきたわけね。

秋野 はい。おふたりは、新田さんのお婆さまをここで待っていたのではないかと。

新田 そうかもしれない。はっきりわからないけど。

秋野 お婆さまはなにも…？

新田 (首を横に振る)お婆ちゃんが家を出たのは、あの人が六十八歳の時で、もう寝耳に水の状態だったわね。衝動的な行動をとるような人じゃなかったから。私はまだ中学生だったけど、家族と折り合いが悪くてね。だけどお婆ちゃんとは仲が良かったから、よけいびつくりしたわ。あのもの静かなお婆ちゃんがつて。でも結局お婆ちゃんは我を通したの。家を出た理由は聞かない。どこにいるかも探さない。会いにもいかない…。

秋野 はあー、過激ですね。

新田 高校出てすぐこっちに出てきて働き始めたけど、私もずっと会いにはいかなかった。で、手紙が？

新田 突然にね。この住所も書いてあった。でも…私は会いにはいかなかった。

秋野 …。

新田 次に連絡があったのは病院からだった。お婆ちゃんは、もしもの時のために私の連絡先だけを病院の人に教えてたの。私は病院に駆けつけた。でも…。(首横振)

秋野 …。

新田 これがその手紙。

秋野 …。

新田 お見せしてもいいけど、その前に…。

秋野 …あ、はい。状況がこつこつ状況ですからキチンとご説明いたします。なぜ木村常一郎さんを探しているかと申しますと、木村さんを連れて帰るためなのです。連れて帰る？ どこへ？

秋野 ワタクシどもの事務所の社長…岩津がですね、ある地方のある村のですね、まあ郷土史といいますが、村史のようなものをまとめる仕事を請け負いまして。

新田 コピーライターってそんなことまでするの？

秋野 まあ、あの、不況の影響といいますが、あの、コピーの仕事だけではやっていけませんので、その、書く仕事ならなんでも…はい。で、ですね、その村のことを調べていくうちに、戦前その村で、非常な名家といいますが、勢力を持っていた一族がいたらしいことがわかりました。戦争を境にその一族は離散してしまっただけなんです…

新田 それか…

秋野 はい。それが木村家です。ところが最近その木村家の生き残りといいますが、子孫の方がこの村にお戻りになりました、ええ。名前も変わって和泉さんとおっしゃる一家なんです、非常に成功されて、故郷に錦を飾ったようなわけです。

新田 へえ…。

秋野 そのご一家のお話によるとですね、木村家の跡継ぎで、ずっと昔に村を出て、それきり行方がわからなくなった人がいたんだそうです。まあ家を継ぐのがイヤだったらしく、親のお膳立てした縁組みを拒否して、村の女性と…その…

新田 駆け落ちした？

秋野 そのようです。女性はすでに身ごもっていたようです。まあ長男は勘当、本家は次男が継いで木村家は続いていくんですが、一年後、その長男から手紙が来て、子供も三歳になり元気でやっていると知らせがあったそうです。その手紙が残っていたんですね。子供の名前は…

新田 …。

秋野 はい。常一郎と書いてあったそうです。手紙の日付は大正二年、一九一三年です。木村さんは明治四十三年生まれ。計算は合います。

新田 なるほどね…。

秋野 本来ならここで本家も勘当を解いて和解にいたるところだったんでしょがしかし、その後すぐ戦争が始まります。

新田 戦争？ 太平洋戦争って昭和じゃなかった？

秋野 いえ、第一次世界大戦です。

新田 ああ…。

秋野 ええ。遠い遠い昔の話なんです、これは。この戦争で一時連絡が絶え、再び無事を知らせる連絡があった時、長男一家は横浜に移り住んでいたそうです。

新田 横浜…。

秋野 常一郎さんが十二歳の時です。そしてそれ以来、長男一家とは一切の連絡がとれなくなりました。彼らがどうなったのか、誰にもわかりません。現在の木村家…つまり和泉家の方々は、この常一郎という本来なら本家筋にあたる人物が、万に一つでも存命なら、是非故郷に迎えたいとおっしゃっているそうです。

新田 連れて帰るわけね。どちらか一人を…。

秋野 どちらが木村さんがわかれば…はい。

新田 わからなかったら？

秋野 事が事ですから、見当で、というわけには行かないと思います。

新田 そうよね…。

秋野 そういった事情なので、是非ワタクシどもとしては、どちらが木村常一郎さんなのかをつきとめたいというわけなのです。

新田 ……秋野さん。

秋野 はい。

新田 お婆ちゃんは昔のことをほとんど口にしらない人だったけど私憶えてることがあるのよ。

秋野 はい。

新田 田舎にいた頃とにかく東京に出て行きたくてね、どんな街があるんだろうってどんな人がいるんだろうって憧れて、そんな話ばかりお婆ちゃんにしてた。私が一方的にしゃべるばかりだったけど、横浜の中華街の話をした時お婆ちゃんがポツリと言ったことがあるの。昭和の初め、うんと子供の頃、できたばかりの横浜の山下公園で遊んだことを憶えてるって…。

秋野 じゃあ…お婆さまは横浜にいらっしやっただことが…

新田、手紙の束をとりだす。

新田 これが宣子お婆ちゃんの手紙です。

秋野 はい。

新田 具体的なことはほとんど書いてないから…参考にならないと思うけど、よかったら…。

秋野 あ、感謝します。

新田 でもね難しいと思うわよ。

秋野 できる限り、やってみます。今後、しばしばお邪魔することになるかもしれませんが、よろしいでしょうか。

新田 ええ、いいですよ。

秋野 ありがとうございます。

新田 いいえ。じゃあ私、寝かしつけてから、帰るから…はい。ではお先に失礼いたします。

秋野退場。

新田、カーテンの中へ入る。

昭和の幻想。

男1（若い木村）登場。

男1、カーテンに映る三人の影を外から眺めている。

男2（若い月島）登場。

男2 よう。

男1 おつ。

男2 なんだか外が騒がしいじゃないか。

男1 探してるようだな、俺たちを。

男2 俺たちのうちのどっちかを、だろつ。

男1 同じことさ。

男2 いつまでこうしてるんだ。

男1 さあ。

男2 もういいんじゃないのか。

男1 そういうあんただってここに来てる。

男2 まあな。

男1 あんたのほうこそ、もういいんじゃないのか。

男2 …。長かったな。

男1 お互いもうすぐ一世紀分生きることになるんだ。じゅうぶんだろ？

男2 そういいながら、おれたちは「ここ」で「こう」してる。知ってるか？ 今がいつなのか…。

男1 …。

男2 平成十七年だよ。明治、大正、昭和…四つの時代を俺たちは生きた。もう俺たちを知っている人間はいない。

男1 そうだな。

男2 俺たち自身でさえ、もうわからなくなってるんだ。木村常一郎はあんたか俺か？

男1 月島茂は俺かあんたか？ 外の人間にそれがわかるわけがない、そうだよ。

男1 ああ。

男2 不思議に思わないか？ 俺たちはぜんぶを憶えている。ここには俺たちの記憶のすべてがある。なのに、俺たちには自分が誰かさえもわからない。出来事の糸を結びつけることができない。

男1 もう思い出すことはできないと思うか？ 死ぬまで？

男2 思い出して何になるんだ？ 俺たちにはもう名前はいらないさ。死んだらこの世界が消滅して終わるだけだ。欲しいのはただ…

男2が指さす。カーテンを内側から引き開け、若い宣子登場。

宣子 常一郎さん！ 茂さん！

男1 宣子…。

男2 彼女も死んだ。俺もおまえも、彼女をずっと待っていた。でももう彼女はいない。

宣子 ふたりとも今日はずいぶん顔色がいいわあ。まるで最初に会った時みたい。

男1 ああ。君もずいぶん…若く見えるよ。

宣子 いやだなあ、あたしはもともと若いんですう、だ。

男2 君のおかげだよ、俺たちがこうして元気でいられるのは。

宣子 お世辞言ってもダメよ。

男1 お世辞なもんか。今日も綺麗だよ、宣子。

宣子 もう！ いいからふたりとも中に入んなさい。夜風は体によくはないわよ。

宣子、ふたりの手をとる。

宣子 ほら、座って。疲れたでしょう、ふたりとも。

男1 君の方こそ疲れたんじゃないのか。

宣子 あらどうして？

男1 ずっと俺たちの世話をしてきたら。たまには外に出て、どこへでも好きならこゝろへ遊びにでも行ってくりゃいいんだよ。

宣子 外？

男1 そう、外。

宣子 外ってどこ？

男2 外っていうのは、そうだな…俺たち以外の人間がいるところ、かな。

宣子 それなら別に行きたくないわ、外なんか。

男1 いいのか、年寄り相手ばかりで。

宣子 年寄り年寄りって何度も言わないの。常一郎さんと茂さんは同い年でしょ？
あたしはふたりと同じ亥年いの一まわり下だから、もう八十三のお婆さんよ。

男2 八十三か…。

男1 そのひと回り上ってことは、俺たち…

男2 九十五さ。

男1 …（やれやれという感じ）

宣子 ね？ たいして違わないじゃない？ そうなっちゃえば。

男1 確かに。

宣子 昔はそうじゃなかったわ。出会ったときの常一郎さんは、すごく年上の大人に見えたし、茂さんは落ち着いててまるでお父さんみたいだったな。

宣子の視線は、ふたりの男のどちらも特定しない。

宣子 こうして三人で暮らせる日がくるなんて、本当は信じてなかった。だから今はとても幸せだわ。

男2 しあわせ？

宣子 ええ。

男2 でも君はもう…

男1 おい。

男1、目で男2を抑える。

宣子 さあ！ 今日は何にをする？ なにして遊ぶ？

男1 なんでも、君の好きなことでいいよ。

宣子 好きなこと？ じゃあいつものお話をしてちょうだい。

男1 お話か。

宣子 ええ、お話。

男1、お先にどうぞ、というように男2に手を。

男2 ふたりの男がいたんだ。ふたりは別々に生まれて別々の生活をしてた。

男1 ひとりの女がいた。ふたりの男のうちの片方と、女は出会った。そして、恋をした。

宣子 恋をした。

男2 そう、そしてふたりは結婚して所帯を持った。

男1 一九四一年、昭和十六年のことだった。

男2 そう、そしてすぐに、戦争が始まった。

宣子 戦争…。

男1 外国の話じゃない。日本の話だよ。昔はね、日本も戦争をしてたんだ。

宣子 …。

男2 よその国に兵隊を送って、たくさんの人を殺して、殺されて…

男1 男は戦争に行ったんだ。その時男は三十三歳。若くて健康な男はみんな戦争に行ったんだよ。

男2 男は必ず帰ってくると言った。女はずっと待ってた。男が帰ってくるのを。
 男1 ひとりで、ずっと待っていた。
 宣子 ひとりで？
 男1 そうだ。ひとりで。
 宣子 ひとり…

宣子の様子が、変わってくる。

宣子 ひとりはやだ…
 男1 宣子…
 宣子 ひとりはいや…
 男2 宣子！
 宣子 宣子って…誰？

うずくまってしまふ宣子を介抱する男1、2。

宣子 あたし、宣子じゃないもん…。帰っても…誰もいないんだもん…。
 男1 …。
 宣子 おじちゃんたち…誰？ おじちゃんたち…あたしと遊んでくれるの？ いっしょにいてくれるの？

男2 君は…。

宣子 いや…ひとりはいや！

男1 宣子じゃない…彼女は宣子じゃない。

男2 そんな筈はない。俺たちは…

男1 宣子じゃないんだ。ここにはすべてがあるってあんた言ったな。

男2 …

男1 結びつけられない記憶の断片なんだ、これは。

男2 じゃあ…この子は…

男1 (女の子に)「だいたいようぶ。こわくないよ。君はひとりじゃない。俺たちがいる。

宣子 ホント？ ホントに？ おじちゃんたち、いっしょにいてくれるの？

男1 ああ。心配ないよ。

男2 この子は誰なんだ…。

小さく体を丸める宣子(麻紀子)を、なすすべもなく見守る男ふたり。

背後にニワトリ男の影が現れる。

ニワトリ男登場

男1 なんだ、あれは…
 男2 …あれは…あいつは…

ニワトリ男の口が激しく動いている。何事かを叫んでいる。しかしその声は聞こえない。

暗転

ACT 2

秋野、携帯電話で会話している。

秋野 秋野です。おはようございます。あの、そちらのほうはどうでしょうか。え？ いや、役所の記録の方は…。はい。はい。はい。はい。え。はい。あの写真とか指紋とか、本人を特定できるものは…。ない。いつさい、ない。なるほど。あの、横浜のほうの記録は。はい、あ、じゃあわかりしだいお願いします。あとは…。え？ 歯科治療記録。歯医者さんの記録があれば、わかるかも？…あのふたり、歯があるんでしょうか？ ええ、じゃあとりあえずお願いします。いやいや、こちらはもう手一杯です。む、無理です。すみません。はい、じゃあ私はこれからあの、例の吉沢さんという人と…。あ（切れた、電池切れ）。…。もしも。もしも。…。

秋野退場。

朝。愛の里室内。カーテンが開まっている。

花瓶の花が変わっている。

カーテンの内側から、カラの食器を持って新田登場。

新田 やつと食べてくれたわ。あら小田島さん？ 帰っちゃったの？

新田、見回すが誰もいない。

新田、食器を下げて退場。

電力会社の作業員風の男（刑事飯田）がこっそり部屋に入ってくる。室内の様子を検分し、花を見てなにことが考え込んでいる様子。

飯田 …。

飯田、カーテンをめくろうとして、人が来る気配に気付き、あわてて退場。
女（吉沢）、絵の入った包みを持って登場

吉沢 あのー、すみません。

客席側にいる誰かに気が付く。

吉沢 びっくりしたあ…。すみません、勝手に入っちゃって…。

見えない相手は無言。

吉沢 あの…そんなところで何を…あれ。

相手がいなくなったらしい。

吉沢 なんだ、今の…。

吉沢カーテンの向こうに人がいるのに気がつく。

吉沢 あの…。

吉沢、カーテンをめくるところ。
新田、漫瓶を二つもって登場。

新田 なにしてるんです。

吉沢 わあ！ びっくりした。

新田 なにかご用ですか？

吉沢 すみません、えーとですね、吉沢ですけど、あの、絵を持ってきたんですけど…

新田 は？

吉沢 コレ。

新田 はあ。それ絵なの？

吉沢 はい。

新田 それで？

吉沢 は？

新田 え？

吉沢 いや、ですから、絵を持ってくるようにと…。

新田 絵って？

吉沢 これです。

新田 …？

吉沢 あの、吉沢です。

新田 いやわかってますよ。

吉沢 秋野さんですよ。

新田 新田ですけど。

吉沢 あ。ごめんなさい。秋野さんという方と…あの、新聞で…

新田 秋野さんて、ああコピーライターの…え、新聞？

吉沢 新聞です。

新田 新聞がどうしたの？

吉沢 あの、あ、コレです、コレ。

吉沢、新聞の切り抜きを出す。

吉沢 この、これです。

新田 尋ね人…。木村常一郎、月島茂どちらかの消息知る人連絡づつ。岩津コピーライター事務所。

吉沢 それで、メールで連絡したんです。今日このビルの前で秋野さんと待ち合わせしてたんですけど…。

新田 消息知る人連絡づつ……。吉沢を指さす（

吉沢 （頷く）

新田、あわててカーテンを開ける。

爺たちと吉沢、対面。

新田、期待して吉沢を見る。

吉沢 あ、はじめまして！ 吉沢まなみと申します。（ペこり）

新田 …（がっかり）

吉沢 （にこにこ）あの、お元気そうですね。

新田 …はじめましてなんだ…。

吉沢 は？

新田 せっかく来てもらって悪いんだけどね、すっかりボケちゃってね。なんにもわからなと思うわよ。

吉沢 そうなんですか…。あ、でも、この絵見せれば、もしかして…

新田 その絵、なんなの？

吉沢 それがですねえ、話せば長いんですけどお…

吉沢、絵の包みを解きながら

吉沢 わたしの祖父が持ってた絵なんですけど、とってもいいなんです。わたし子供の頃から田舎でこれ見て育ったんですよ。…はい、これです。

吉沢、女性の肖像画を掲げて見せる。

新田 …。(絵をじっと見ている)

吉沢 で、ここ、見てください。サインが入ってるんです。見えます。S・TUKIS IMA。昭和23年。ね？

新田 …。

吉沢 すてきでしょ？ 六十年前の絵とは思えないですよ。この人、たぶんわたしと同じくらいの歳ですよ、きっと。

新田 六十年前…。

吉沢 二十歳前後くらいかなあ、やさしそうな感じですよ。ねえ。

新田 …。

吉沢 あの…どうしたんですか。

新田 …。

吉沢 ……。泣いてらっしゃるんですか？…あの…

新田 お婆ちゃんだわ…。

吉沢 えっ…

息を切らして秋野登場。

秋野 はあはあはあ…すみません、遅れてしまいました。秋野です。あ、新田さん、どうも、あの…

新田、ぐいと涙をぬぐって絵を取り、爺ふたりに向ける。

新田 思い出して！ これ、描いたんですよ？ 宣子おばあちゃんの絵よ！ 思い出して！

秋野 …あの、いったい、な、なにが…

新田 思い出さない！ このボケじじい…！

爺がふたりとも絵に反応する。

爺（木村） の、ぶこ…？

爺（月島） のぶこ…？

爺（木村） のぶこ…

爺（月島） のぶこ…

新田 どっちなのよ！ なんて両方宣子なのよ！

爺（木村） のぶお…

爺（月島） のぶ、お…？

爺（木村） のびこ…

爺（月島） のびこ…！

爺（木村） のびこおおお！

爺（月島） のびこおおお！

爺（木村） のびた？

爺（月島） のびたあああ！

新田 いいかげんにしろよおまえら…。

吉沢 あっ。

新田、切れて爺たちにつかみかかろうとするのを、あわてて吉沢、秋野が止める。

秋野 新田さん、おち、おちついて！

新田 自分の名前くらい！好きだった女のことくらい！おぼえてやがれクソ爺っ！

秋野 新田さん、新田さん！

爺おそれてカーテンに隠れる。
騒ぎおさまる。

新田 はあはあはあ…。

秋野 だいじょうぶですか？

新田 （頷く）

吉沢 でもちよつと反応あったですよ。

秋野 そうですそうです。一歩前進じゃないですか。

新田 足踏みしてるだけよッ。

吉沢 希望ありますよ。ねっ。

秋野 うん。考えてみれば、月島さんも木村さんも二十年近く宣子さんと暮らしてたわけですから、両者とも反応しても不思議はないわけで…

新田 いいえお婆ちゃんはおばあちゃんと月島さんは特別な関係だったはずよ。この絵は昭和二十三年に描かれてる…。おばあちゃんが二十三才のときよ。

吉沢 昭和二十三年…。

新田 おばあちゃん手紙に書いてた。長い年月を経てもういちど巡りあえて神様に感謝してるって…。それはきつと月島さんのことのはず。だからおばあちゃんそれ以来ずつと面倒を見てた、死ぬまで…。

吉沢 へえ…

新田 それをあのボケ爺めら…（立ち上がる、おさえる秋野）

秋野 あっ、まあまああ。

新田 （気を静める）…まあ、いいけど…別にいまさらどっちがどっちってわかったところで仕方ないしね。

秋野 そういいながら恭子さん、もう三年も面倒見てるじゃないですか。

新田 仕方ないわよ、なりゆきよ。

吉沢 あの…ちよつと聞いていいですか？それでもこの…宣子さんは月島さんと結婚はしなかったんですよね？

新田 そうね。結局、あたしのおじいちゃんと結婚した。月島さんは、結婚に向いてるような人じゃなかったみたいね。

吉沢 ああ、やっぱりそうなんですか。

秋野 やっぱりって？

吉沢 この絵、あたしのお爺ちゃんが持ってたものなんですけど、もともとお爺ちゃんのものだったわけじゃなくて…。

秋野 どういうことでしょうか？

吉沢 つまりですね、ええとお爺ちゃんが中学生のとき、ある先生がいて、その先生が学校をクビになっただんだそうです。

秋野 …？

吉沢 なんだか、思想的にこう、偏った教育をしてるとか疑いをかけられて。よくわからないんですけど、当時そういう取り締まりが厳しかったんだそうです。で、その先生いきなり学校から姿を消してしまっただけで、その先生が学校の美術室で描いていた絵が残っていて…

秋野 あ、じゃ、それが…

吉沢 ええ、これです。お爺ちゃん、美術部だったんで…。警察が持って行く前にとって、持って帰ってきたんだって言ってましたね。

秋野 じゃあ、じゃあ月島さんは、新田さんのお婆様と出会った頃、学校の先生をしてたんですね？

吉沢 ということになりますね。

秋野 …。誰か覚えてる人がいるかも…。

吉沢 それ、お爺ちゃんに電話して聞いたみたんですけど、もともと代用教員で、すぐいなくなっちゃったんで、覚えてる人もいないだろうって…。

秋野、ふと花瓶の花に目をやる。

秋野 …この花…

新田 え？ ああ。

秋野 この前のと違いますよね。

新田 ええ。また小田島さんが来たのよ、ついさっき。

秋野 …小田島。女の方ですか？

新田 そういえば秋野さん最初に来たときも、来てたわね。

秋野 ええ、たぶんお会いしました。あの方は、どういう？

新田 あの人は近所の人みたい。なんだか、ふたりが散歩してる時に公園で知り合いになっただんで。

秋野 散歩？

新田 たまにね、外に出さないとカビ生えちゃうでしょ。

秋野 あの、小田島さんと言う方は、どっちが木村さんでどっちが月島さんかご存じだったりしないでしょうかね？

新田 だって知り合ったのがここ数年のことだもの。もうポケちゃった後…。

秋野 …。

新田 どうかした？

秋野 いや…あの、気のせいかもしれませんが…。

新田 なによ、またあっちに誰がいるとか言わないでちょうだいよね…。

秋野 いやいや…そうではなくて、あのですね、あの…

吉沢 あっ。

新田 なによ、脅かさないで。

吉沢 いましたよ。あそこに。

新田 ちよっとお！

吉沢 すぐいなくなっちゃったんですけど、確かに見ましたよ。なんか黄色い帽子みたいなのがぶって…。

新田 …黄色い帽子？ やだなあもう、なんか…不気味じゃないの。

吉沢 暗がりによく見えなかったんですけど、確かそんな…

秋野 あの…追い打ちをかけるようにで申し訳ないのですが…

新田 ええ？

秋野 私も確かに…私が見たのも…黄色い帽子のようなものをかぶっていたような気がいたします…。

新田 …。

三人、顔を見合わせる。

秋野 あの、新田さん今日はお仕事は…。

新田 今日は休み。

秋野 吉沢さん、お時間は…。

吉沢 え、ありますけど…。

新田 どうでしょう。おふたりも落ち着かれたようですし、場所を変えてですね、ちよっと整理させていただきませんか、情報を…。

吉沢 いいですよ。

新田 そうね、ちよっと外出しましょうか。

秋野 ありがとうございます。では。

三人退場。

飯田、登場。

カーテンを開ける。

爺たち、飯田を見る。

飯田 …。

爺たち …。

飯田 …こんにちは。

爺たち …。

飯田 月島さん。

爺たち …。

飯田 木村さん。

爺たち …。

飯田 …（返事がない。なるほど、といつかつに頷く）自分も…私も田舎にひい爺さんがひとり、まだいるんですよ。お爺さんたちとほとんど同じくらいの年ですが、また頭はしっかりしてます。でももう寝たきりで…まあ家族は苦労してますよ。体が元気がいいのか、頭が元気がいいのか。どっちもどっちですかね…。

爺たち …。

飯田 僕も年取ったら誰が面倒みてくれるんだろうって、時々考えますよ。気が早いですかね？ まあまだ独身なんですけどね。家族がいたらこうしてここに通ってもいられないでしょうけど…。

爺たち…。

飯田 ……どうして小田島さんは…ここに通ってるんですかね。わかります？ 僕にはわかるような、わからないような…。僕だったら、僕があの人のお立場だったら、ここには来ないかもしれないと思います。でも彼女はここに通ってる。お爺さんたちには会いに来る。どうしてでしょう？

爺（月島） 約束だからの。

飯田 ……。はい？

爺（月島） ……。

飯田 なんの約束です？

爺（木村） ひとりぼっちだったんだよ。あの子は。

飯田 はい。

爺（月島） わしらもそうだったよ、子供の頃はなあ。

爺（木村） ああ、そうだった。

飯田 はい。

爺（木村） みんな死んでしまったんじや。あの子と同じぐらの年じやった。

飯田 ……それは、いつのことです？

爺（月島） 忘れもせんわ。大正十二年九月一日じやあ。

飯田 関東大震災ですね。

爺（木村） たったひとりで生き残ってしもうたわ。

爺（月島） だからだよ。あの子と約束したんじや。

爺（木村） あの子にだけはな、わしらも話したよ。いろんなことを…

爺（月島） どうせわしらはもうどこへもいかん。ここでずっと待つだけじやからな。

飯田 ……誰を待っていたんです？

爺（木村） 宣子…約束した…

飯田 ……

爺（月島） 宣子…約束したんじや…いつか三人で…

飯田 でもあの方は、宣子じゃないですよ。麻紀子です。小田島麻紀子。

爺（木村） 宣子…麻紀子…

爺（月島） 麻紀子…宣子…思い出せん…

爺（木村） 思い出せん…

飯田 （しばらくふたりを見守っているが…木村さん、月島さん。どうぞお休みになつてください。また、来ます。

飯田、カーテンを閉じ静かに退場。

新田、吉沢、秋野。

秋野 いいですか？ ここに、和泉家の方からの情報、新田さんのお婆様宣子さんの手紙、それから昔月島ビルに出入りしていた町内会長のメモ。この三つの資料があります。

吉沢・新田 ハイ。

秋野 これらを総合してもう一回順番を追ってみます。

吉沢・新田 ハイ。

秋野 まず最初、町内会長の聞き書きによりますと、木村常一郎さんは、横浜に住んでいた少年時代、関東大震災で家族を失い、孤児になったということ。…そして宣子さんもまた横浜に住んでいたことがあります。これは果たして偶然なのか、それともふたりにはなにかつながりがあるのか…。

吉沢 もしつながらがあるとすれば…

秋野 はい。一方で吉沢さんの絵からわかるように、宣子さんは若い頃に月島茂さんと出会い、特別な関係にあったのではないかと推測されます。ということは、宣子さんは木村さん、月島さん両方となんらかの関係があったと…

新田 どんな関係？

秋野 それはわかりません。横浜の役所の記録をただいまウチの社長が調査しておりませんが、次に…、新田さんに宛てた宣子さんの手紙の中に、こういう一節があります。「二十年前の常夜月は今も曇らずに地を照らしているか、戻ってそれを見届けずには私は死ねません…」。

新田 トコヨツキって読むの、それ？ ジョウヤゲツかと思ってた。なんのことかわからなかったのよね…。

秋野 辞書を引いてもそういう言葉は載ってないようですが、トコヨの月、一晚中曇らずに常に照らしている月ということでしょうか…。わたしにはこれは…

吉沢 そうか！ 木村常一郎の「常」。

秋野 そして月島茂の「月」。これは木村常一郎さんと月島茂さんお二人を指す言葉ではないでしょうか。

新田 三十年前…。

秋野 ええ。そこで何があったのかわかりませんが…宣子さんはすべてを捨ててこの月島ビルに…

吉沢 戻ってきた…

秋野 そう。そこです。戻ってそれを見届けずにはおれない。宣子さんは、あのビルにいたことがあるんです。そこで木村さん月島さんと、なにかの約束をしたのではないのでしょうか。

新田 じゃああのふたりも、その約束のためにあそこに帰ってきた…。

秋野 町内会長のメモにあります。「木村老曰く、我々はふたりとも同じ相手を持っている。月島老応えて曰く、三十年前の約束なり」と。

携帯鳴る。

秋野 はい、秋野です。今、新田さんと吉沢さんと三人ですね、駅前のサイゼリヤにてお互いの情報を整理…は？ はい、はい、え…。

新田 なに、どうしたの？

秋野 …横浜のほうの役所でわかったそうです。かるつじて戦前の記録が一部残っています、木村常一郎さんが昭和十六年、住んでいた記録があったそうです。

吉沢 やっぱり横浜にいたんだ…。

秋野 ええ、そして、その記録には、世帯主木村常一郎、妻、宣子と、あるそうです…。

驚いて言葉を失う新田。

吉沢 宣子さんと木村さんが、…夫婦？
 秋野 はい。
 新田 じゃあどうしてお婆ちゃんは…
 秋野 木村さんは戦争に行かれました。そして終戦の四年後に復員した記録があるそうです。その後木村さんが宣子さんと会えたのか。そこでなにがあったのかは…
 まったくわかりません。

暗転。

薄闇の中で

男1、2、ニワトリ男。

男1（木村） 思い出したか。
 男2（月島） 無理だ。
 男1（木村） あいつは誰だ。
 男2（月島） わからない。
 男1（木村） これは俺の記憶か。それともおまえのか。
 男2（月島） わからない。
 男1（木村） あの、くちばしと翼を持った男は誰だ。
 男2（月島） わからない。
 男1（木村） 憶えている。
 男2（月島） …。
 男1（木村） 俺にはあれがなんだかわかる。
 男2（月島） …おまえは…
 男1（木村） 俺にはあれがなんだかわかる。
 男2（月島） …あの女の子は…麻紀子？…あの時の…
 男1（木村） もう少して…思い出せる。あれは…
 男2（月島） …宣子…麻紀子…宣子…おまえは…
 男1（木村） 見る。

男1、2、退場。

幻想の昭和。
 カーテンはあいている。椅子には誰もいない。
 ニワトリ男が中央に座っている。

男（八百球）登場。

八百球 奥さん、奥さん！ 八百球です。
 ニワトリ男 …。
 八百球 なんだおまえだけか。オイ、奥さんどこ行った奥さん。
 ニワトリ男 なんつってな。コケッコーにきいても分かりやしねえか。
 ニワトリ男 買い物だ。
 八百球 買い物か、なんだ、そうか、おまえ、しゃべれるのか！
 ニワトリ男 …。

八百球 ったく、変わったヤロウだな、ええ？ おい、おいこら、コケコッコ。おま
え人間なのかニワトリなのかどっちなんだ、えっ？

ニワトリ男 …（黙って両手を広げてみせる）

八百球 なんなんだよ。わかんねえんだよ。メッセージが！ ったくこんなのをひとつ
ひとつ屋根の下に住まわしてる奥さんの気が知れねえや。おい、コケ。

ニワトリ男 …。

八百球 宣子奥さんに手エだか手羽だかなんだか知んねエけど、何か悪さしちやいねエ
だろっなっコラ。

ニワトリ男 …。（黙って両手を広げる）

八百球 だから伝わんねーんだよ、メッセージが！ いいか、コケコッコ。宣子奥さん
はな、戦争にとられたダンナの帰りを待つて健気にひとりで生き抜いているんだ
ぞ。帰ってくるかどうか分からねエダンナに操を立ててひとり身をかたくなに
守ってんだ。チクシヨウ、何てもったいねエ…。いやいや、何て健気な…見上げ
たもんだよ屋根屋のフンドシときたもんだチクシヨウメ！

ニワトリ男 …。

八百球 ここにこんなイイ男がスタンバってるって言うのに…。チクシヨ。この俺の
気持ちかわかるか、え？ ニワトリ風情にこの切ない男心分かるのか、えッ！

ニワトリ男 …コケッ。

八百球 うるせえ！ 慰めになってねエだろ、このヤロウ！ 慰めろ！ オレを！ 今
すぐ！ 逃げんな！ オレを抱きしめろッ！ 羽毛でやさしく包みこめッ！ あ、
奥さん。

宣子登場している。

宣子 あら、久さん、来てたの？

八百球 いや、ちよっとそこまで来たもんで…。あの、あ、これ。（野菜を出す）

宣子 あらあ、いつも悪いわねエ。

八百球 イヤイヤイヤイヤ…エへへへ。あ、あまりモンなんで。

宣子 何もないけど、お茶でも飲んでってね。（準備する）

八百球 あ、あ、かたじけねエ…。宣子さん、奥さん、あれですか、あの…。

宣子 なアに。

八百球 ダンナさんは…その…まだ…

宣子 うん。…でもね。戦死したっていう知らせが来ないうちは信じようと思ってる
の。八百球 …。

宣子 帰ってくるって。

八百球 …。

宣子 あの人、身寄りもないし、あたしぐらい信じてあげないとね。

八百球 そうすね…。

ニワトリ男、ゆっくり立ち上がる。

八百球 な、なんだよ、いきなり、オドカすなよ。

宣子 何？ どうしたの？

カラカラと戸が開く音。宣子の手から湯のみが落ちる。

宣子 あ…あなた…。

全員の目が客席方向に向けられる。

八百球 ダンナ…木村のダンナ…！

ニワトリ男の手がゆっくりと広げられる。地鳴りのような音が少しずつ大きくなっていく。
ドーンと言つ轟音とともに強烈な振動がおそつ。
八百球と宣子は悲鳴をあげて倒れる。
その中でニワトリ男は微動だにせずスツクと立ちつくし、まっすぐに木村を見つめている。

八百球 ななな、なんだッ…どうしたってんだ！ うわあッ！

宣子 あなた…！

ニワトリ男 大正十二年九月一日正午、源を伊豆大島付近の海中に発した地震は東京湾相模湾沿岸一帯をゆりつぶした。同時に各所に発した火のために大東京の大半、横浜・横須賀はすべて焼き払われ、沿海海底の地形を一変させ、実に十数万人の死者を出すという大惨事となった。

宣子 あなた…！ あなたあ！

八百球 奥さんあぶねえッ！ う、うわああ！

ニワトリ男 記憶にあるか木村常一郎。おまえの混乱した脳の中でこの阿鼻叫喚の記憶の断片が星の瞬きのように点滅しているのがわかるか木村常一郎。

宣子 常一郎さん！

八百球 奥さんあぶねえ！ そつちはダメだ！

ニワトリ男 その女がわかるか木村常一郎。誰だその女は。その女は誰だ。その女をどうする木村常一郎。

宣子 常一郎さん！

八百球 騙されちゃいけねえ奥さん！ 震災は大正十二年、敗戦は昭和二十年、二十二年前の話だ！ ありやああなたの旦那じゃねえんだ…！

宣子 いいえ、あれは常一郎さんよ！ あれは…！

ニワトリ男 今はいつだ、この女は誰だ、おまえはどこにいる木村常一郎。おまえにそれがわかるか。

八百球 あなたの旦那は震災当時まだ十歳のガキだった筈だ！ あんたと所帯を持つよりずっと前の話なんだ！ 騙されるな、こいつは、こいつは、夢なんだ！

ニワトリ男 さあ振り返れ木村常一郎。そこはどこだ。今日はいつだ。振り返れ！

周囲に火の手が上がっている。

振動は激しさを増している。

八百球 あんたは…いや、て、てめえは…てめえは、誰だッ！

ニワトリ男 コケーーーーッ！

場転

爺ふたりが後ろ向きに立っている。

客席側を振り返る。

ビルの部屋。

カーテンはあいている。

羽根をひろげる真似をしたり、わけのわからないことをしている。爺たち、なにかに気付いた様子で、椅子に戻る。カーテンを閉める。

吉沢、秋野、登場。
秋野、携帯電話。

秋野 はい、はい、はい、え？ はい。いやいや違います。つまり月島茂っていう人は、戦前から思想的に偏っているといつことまで目をつけられてたと、そういうことらしいです。ええ、兵役拒否で戦争にも行ってません。はい、戦後教師をしていたことがあり、その後はどこでどうしていたのか、全然わからないわけです。一方木村さんのほうは、関東大震災で消息が途絶えた後、宣子さんと結婚し、すぐ戦争に行き、これまたその後の消息はわからないのです。え、いや、ですから、この三人の関係を探ることで見えてくればと…。え、時間がない。和泉さんが？ 今日ですか？ そうですか。え、私ですか。はあ。ではあの例の小田島という人のことをお願いしますね。ええ二十代だと思います。小田島麻紀子。はい。そうです。いや、お願いしますよ。あの、あの、わたしアルバイトなんですから、そんなところまで手がまわり…あ（切れている）。

吉沢 アルバイトなんですかあ。

秋野 うん、まあ。

吉沢 なんでその小田島っていう人を探すんですか？

秋野 ええ、あの、ちょっと気になります。

吉沢 この近所の人なんですよ？

秋野 ええ、新田さんはそのように。ですがその、例のメモをお借りした町内会長さんに聞いてみたんですが…

吉沢 ああ、町内のことはなんでも知ってるっていう…

秋野 小田島という名前の方はこの町にはひとりも住んでいないのだそうです。

吉沢 そうなんだ…

秋野 ええ、さらには…私の気のせいかもしれないのですが…。あの人に会ったとき、木村常一郎さんはいらっしやいますかって、聞いたんですが…

吉沢 はい。

秋野 あの人確かにあの時……………どちらか一人を指差していた…。

吉沢 え、どっちを？

秋野 カーテンがかかっていたので…。

吉沢 そっかあ。残念。

秋野 あの、吉沢さんは、なんでここに。

吉沢 あたしもなんだか興味がわいちゃって。どっちがこの絵の作者なのか、なんとか知りたいなあって思って。

秋野 なるほど。

吉沢 で、今日はちょっと作戦があります。待ち合わせしてらんです。なんかかわかったら知らせますよ。

秋野 ぜひ、よろしく。では、あの、これで。

吉沢 あれ、今日は愛の里行かないんですか？

秋野 あの、実は例の、和泉さんという方の息子さんが東京に出ていらっしやいます…

吉沢 あ、木村さんの親戚っていう…

秋野 ええ、で、東京駅まで出迎えに…
 吉沢 じゃあもう時間があんまりないじゃないですか。
 秋野 ええ、まあ、やるだけやってみますが。では。
 吉沢 はい。

秋野退場。
 吉沢退場。

ビルの部屋。

カーテンは閉じられている。

吉沢、ふたりの若い男（藤沢、佐竹）をつれて登場。

吉沢 だいじょうぶなの？

藤沢 うん、な？

佐竹 オレは大丈夫じゃないと思う。

藤沢 なんだよ。

佐竹 全然大丈夫じゃないだろ！ 何のネタ合わせもしてないんだぞ。何やるんだよ、え？
 藤沢 うーん。

吉沢 もう、何かかんがえていてって言ったじゃない。

佐竹 昨日の夜だろ！ しかも留守電だろ！

吉沢 こういのはさ、思ったときが吉日よ。

佐竹 あんたが勝手に思っただけだ！！

吉沢 大きな声出さないでよね。佐竹君もつと実践的なボランティアやりたいって言ってなかった？

佐竹 言ったけどさ…。

吉沢 チャンスチャンス。

佐竹 チャンスなもんかい。だいたいなんのために俺たちを呼んだんだよ。だってボケちやってるわけだろ？ 慰問劇なんかやってどうすんだよ。

吉沢 だからなにか刺激を与えればさ、ひよっと記憶が蘇ったりするかもしれないじゃない。とにかく単調な生活がいちばんいけないんだから。刺激刺激！

佐竹 カラムーチョでも食わしときゃいいんだ…。とにかく俺たちは別に芸人でもなんでもないんだから、ボランティア研究会なんだから。他のやつに頼め！ 俺帰るからな。いくぞ藤沢。

藤沢 やろつ。

佐竹 あ？

藤沢 この場所を後にしてどこに我々のボランティア精神の発露の場を求めるといのか。

佐竹 何のセリフだそれは。何か読んだのか。

藤沢 ここまで来たんだからやろつよ。何かやろつ。

佐竹 だから何を！

藤沢 今、何か作ろつ。

佐竹 おまえなあ…。

吉沢 そう、そう、今チャッチャと何か作っちゃいなよ。

佐竹 無責任なこと言つな。

藤沢 チャチャっと。

佐竹 もっ…！

吉沢、客役にまわる。

藤沢・佐竹 どー…もー…！

藤沢 藤沢でー…す！

佐竹 佐竹でー…す！

藤沢 ふたりあわせて！

藤沢・佐竹 藤沢佐竹。

佐竹 効果音刑事〜！

藤沢、ラジカセスイッチオン。

刑事（佐竹） …いい加減吐いたらどうだ。

犯人（藤沢） …。

刑事 お前がやったんだろ！（机バン。灰皿カラカラ）

犯人 知らねえなあ。

刑事 お前はあの日の夜明け前、舎弟のサブローとトラックに乗り込み（バン）、吉沢組組長宅に向かった（プロロロ）。土砂降りの雨の中（ザアー）、ギアをトップにあげたお前は組長宅の正面玄関からトラックごと突っ込んだ（ガシャーン）。サブローは用意の日本刀で若頭以下三十六人を切り倒し（ドシュドバズバ）、お前はその隙を突いてエレベーターで地下四階へ（ウイーン、ポーン）。地下シェルターを守る厚さ36ミリの鋼鉄製の扉を爆破（ドガーン）。逃げ惑う組長を投げ縄でひつとらえ（ヒュンヒュン）、トラックの荷台へ積んで一路東京湾へ向かい、生きたまま海へ投げ込んだ（ザバーン）。どうだ、…その通りだろうが！

犯人 証拠があんのかよ証拠が。エッ？

刑事、黙って胸座を掴む。

犯人 なぐんのかよ！ 殴ってみろよ！ 殴ってみろよ！ エッ？

刑事、犯人の胸座を離してタバコをくわえる。そして犯人にもタバコを分けてやる（カチシュボ）。

刑事 俺はな、藤沢、島で生まれただよ（ザザーン）。種子島だ（アホーアホー）。親父とおふくろは今でも猫の額みたいな段々畑ほしくり返してるよ（ザックザック）。パブリカ作ってんだよ。お前は津軽だったな。たまにはおふくろさんに、メールしてやったらどうだ？

犯人 あんなクソ田舎思い出したくもねえ。

刑事 お前が田舎を忘れても田舎はお前を忘れやしない。（手紙を犯人に差し出す）読んでみる。

犯人 …和紀くん、元気にしていますか？ 今年の冬は雪が多くて大変でした。東京はどうですか？ あなたはお腹を出して寝る癖があるので心配しています。貴方にも早くお腹に毛布をかけてくれるいい人ができるといいですね。出来れば早く孫の顔が見れるといいと思います。

犯人泣き出す。肩に手をかける刑事。

刑事 津軽の雪ももう融けているところだろう。
 犯人 刑事さん、サブローは、あいつは、死んだんですか…？
 刑事 お前の役にたったことが嬉しかったんだろう。満足そうな死に顔だったよ。
 犯人 刑事さん、俺がやりました。

刑事、窓を開ける（ガラガラ）。すると小鳥の鳴き声が聞こえる（ピピピチチチ）。

佐竹 続きまして、効果音刑事、ランダム編。

藤沢、ラジカセオン。

刑事（佐竹） …いい加減吐いたらどうだ（ピピピチチチ）。

犯人（藤沢） 知らねえなあ。

刑事 お前はあの日の夜明け前、舎弟のサブローとトラックに乗り込み（ヒュンヒュンヒュン）、吉沢組組長宅に向かった。土砂降りの雨の中ギアをトップにあげたお前は組長宅の正面玄関からトラックごと突っ込んだ（ガラガラガラ）。サブローは用意の日本刀で若頭以下三十六人を切り倒し（ザックザック）、お前はその隙を突いてエレベーターで地下四階へ（ウイン、ポーン）。地下シエルターを守る厚さ36ミリの鋼鉄製の扉を爆破（ドガン）。逃げ惑う組長を投げ縄でひつとらえ（ドガン）、トラックの荷台へ積んで一路東京湾へ向かい、生きたまま海へ投げ込んだ（ドガン）。どうだ、…その通りだろうが！

犯人 証拠があんのかよ証拠が。えッ？

刑事、黙って胸座を掴む。（びびびチチチ）

犯人 なぐんのかよ！ 殴ってみろよ！ 殴ってみろよ！ えッ？

刑事 俺はな、藤沢、島で生まれたんだよ（バン、プロロロ）。種子島だ。親父とおぶくるは今でも猫の額みたいな段々畑ほじくり返してるよ。パプリカ作ってんだよ（ガシャーん）。よ、読んでみる。

犯人 …和紀くん、元気にしていますか？（ザザー）今年の冬は雪が多くて大変でした。（ドシユズバ）東京はどうですか？（ザバーん）あなたはお腹を出して寝る癖があるので心配しています。貴方にも早くお腹に毛布をかけてくれるいい人ができるといいですね。（ザザーん、アホーアホー）

刑事 津軽の雪ももう融けているところだろう。

犯人 刑事さん、俺がやりました。（カチシュボ）

吉沢 ハイそこまで！

藤沢・佐竹 どうもありがとございました。

吉沢 なかなか面白い。おもしろいんだけど、…お爺ちゃんにはたぶん、わからないと思う。

佐竹 そんなら途中で止めるよ…。

吉沢 違つのにして。わかりやすいやつ。

佐竹 もうネタないもん。

藤沢 じゃああれいこうか。

佐竹 なに？ 銀行？

藤沢 銀行。

吉沢 銀行ってなに？

佐竹 あれはいかん、あれは。まだ作りかけだ。
 吉沢 いいからやってよ、ほら早く。
 佐竹 もう…

吉沢、スタートの合図で手を叩く

藤沢 合併前の銀行名を即答する男！ みずほ銀行。
 佐竹 第一勧業銀行、富士銀行、日本興業銀行！

藤沢 りそな銀行。

佐竹 大和銀行とあさひ銀行！

藤沢 U F J 銀行。

佐竹 三和銀行と東海銀行！

藤沢 三井住友銀行。

佐竹 三井銀行と住友銀行！

藤沢・佐竹 どうもありがとございました。

吉沢 え、それで終わりなの？

佐竹 だから作りかけだって言ったろ！

吉沢 全然意味わかんない。おじいちゃんに分かるやつって言うてるでしょ。

ほそぼそと相談するふたり。

藤沢 世界の名作を五秒で演じきる男！ 風とともに去りぬ。

佐竹、演じる。

藤沢 5、4、3、2、ハイ。走れメロス。

佐竹、演じる。

藤沢 5、4、3、2、ハイ。源氏物語。

佐竹、演じる。

藤沢 5、4、3、2…

吉沢 ちよつとストップストップ！ それ、いいんじゃない、いいんだけど、なんで五

秒しかやんないの。

藤沢 いや、よく知らないから…

吉沢 そついうのでいいわよ、おじいちゃんが知ってるようなので、もっとちゃんと

やってよ、ちゃんと。

藤沢 ちゃんと…

吉沢 ちゃんと。

佐竹 ドサまわりの劇団じゃないんだぞ、俺たちは…。

吉沢 よし、決まり！

佐竹 勝手に決めんな！

三人、退場。

場は愛の里室内に。

吉沢 （再登場）そして裏切られた間貫一は、月夜の熱海の海岸で、胸のうちをお宮にぶつけるのであった。

藤沢、登場
佐竹、登場
爺たち、カーテンから顔をのぞかせる。

藤沢（貫一役） ……いいか宮さん、今月今夜のこの月を覚えておいておくれ、月を見たら僕がどこかで泣いているんだと……来年今月今夜のこの月を、再来年今月今夜のこの月を、十年後の今月今夜のこの月を……きつと僕の涙で、曇らしてみせる！
佐竹（お宮役） そんな悲しい事をいわないで、ねえ貫一さん、どうぞ堪忍して、私は言いたい事が沢山あるけれど、あんまり言いくい事はかりだから口には出さなけれど、たつたひと言いたい事は、私は貴方の事を忘れはしないわ 私が生涯忘れはしないわ。

吉沢 いよお！

藤沢 聞きたくない！ 忘れないならなぜ見棄てたんだ。

佐竹 だから、私は決して見棄てはしないわ。

藤沢 ええい、もういい、夢だ夢だ、長い夢を見たのだ！

佐竹 あ〜れ〜

老人たちの様子がおかしい。
貫一がお宮を足蹴にすると、老人たちが近寄ってくる。

佐竹 あ〜れ〜…わ、ちょちょちょ…なんだなんだ！

爺たち、佐竹をかばおうとしているらしい。

藤沢 あ、なんか元気になってる…わ…

爺たち、藤沢をお宮から遠ざけようと攻撃をしかけてくる

藤沢 あ、いたい、あ、やめて…あ〜

吉沢 あ、お爺ちゃん、落ち着いて！ あの…あつ。

佐竹 いたたたた。

爺（月島） ……

佐竹 へ？

爺（木村） ……なんで裏切った…。なんで捨てたんじゃ…。

佐竹 いやいや、あの…佐竹です。

爺（木村） ……（わめきながら飛びかかる）

佐竹 あれ〜つ。いや〜つ。

爺（月島） ……なんでや。なんでじゃあ〜。宣子おおお…

暗転。

ACT 3

秋野 あ。いいんでしょうか、こんなことで。
男2 なにがかな。

秋野 いやあの、こんな組み合わせは、いいのかな、と。
男1 これでいいのだ。

秋野 あ、自己紹介するべきでしょうか、こういう場合。
男1 秋野さんじゃろ。

男2 よくわかっとなるよ。このたびはごくろうなことじゃな。
秋野 いえあの、なにかとお騒がせいたしましたまして恐縮でございます。

男1 まああなたも仕事じゃからな。
男2 安い時給で、しかも正社員でもないのに我ながらよくやっている、と、あなたは思っている。

秋野 ええ、まあ、性格なんでしょうか。
男1 それだけではないな。

男2 わしらあなたを見ててまず思ったことは、調べ物をしていて、一切メモをとらないことじゃ。あなたかなり優秀じゃな。観察力も鋭い。

秋野 お、おそれいます。あの、よく見ていらっしやいますね。
男1 見とるさ。人間は生まれてから死ぬまで、見たもの全部を決して忘れない。それはわしらみたいにボケてしまった人間でもまったく同じ事だ。

男2 見ることをやめることはできないのじゃよ。なにも見るものがなくなっても、ほれ、ちよつど今あなたのように…自分の頭の中をのぞき込んでる。

秋野 …。

男1 気になつとることがあるんじゃない？

男2 ちいさな棘みたいに頭の片隅に刺さっている言葉があるんじゃない？

秋野 はい、その通りです。
男1 そういふのは大事じゃぞ。

男2 ああ、よく思い出してみることじゃな。いつ聞いたのか、誰から聞いたのか…。そうじゃ、わしらもあなたに、いささか期待してあるでな…。
秋野 いつ、誰から…。あの時だわ、たぶん、そう、町内会長の男の子と話してて…宣子さんが月島ビルに来た頃…バブルがはじけて、たくさんの店が倒産して…
男1、2、静かに退場していく。
秋野、歩き回ってブツブツ。

秋野 幽霊ビル…いいえ、あれは床屋のおじさんが言ってたこと…なんでそんな名前がついたんだろう…事件…そうだ…あのとき会長が言ってた…一家心中事件…

暗転。

吉沢 秋野さん！ 秋野さん！

佐竹、藤沢、吉沢、秋野。

秋野 あ。お。あれ。

吉沢 大丈夫ですか？

秋野 す、すみません、ちょっと…あまり、寝てないもので。
 吉沢 無理しすぎじゃないですか？ お肌が悪いですよ。
 秋野 いやいや、だいじょうぶ、で、あの、なんでしたっけ。
 藤沢 慰問劇やって、ひどい目に会ったっていう話です。
 秋野 そうでしたね、しかしあのふたりがそんなに…。想像つきませんが…。
 佐竹 ホントですよ。あれはマジです、マジ。
 秋野 …ふたりとも？
 藤沢 ふたりともです。
 秋野 ふたりとも、宣子さんに捨てられた、裏切られたという感じだったと。
 吉沢 木村さんはともかく、なんで月島さんまで…
 秋野 演し物は、金色夜叉。
 藤沢 そうです。
 秋野 今月今夜のこの月をっていう、アレですか。
 吉沢 それって有名なんですか？
 秋野 まあ…今の若い人はあまり知らないかも…。男が女に裏切られる話ですけど…。
 吉沢 でも宣子さんここに戻ってきたじゃないですか。
 秋野 なにか…きつと…約束したんだと思います。ずっと昔に…三人が離ればなれになる前に…
 吉沢 どんな約束？
 秋野 今はわかりません…。でも…
 吉沢 でも？
 秋野 ……あの、私、ちょっと失礼します。
 吉沢 え。
 秋野 たぶん、もしかして…
 吉沢 なんですか、なにかわかったんですか？
 秋野 あの、よかつたら新田さんに伝えておいてくださいませんか。木村さんを本当に連れて帰ってしまっただけ、あのふたりを離ればなれにしてしまっただけ、いいのかわかるか。
 吉沢 連れて帰って…だつて、どっちが木村さんかわからないのに…
 秋野 わかる、と思います…たぶん。
 吉沢 えっ。あのっ！
 秋野 お願いします。
 秋野、退場。
 残り三人、追って退場。
 昭和の幻想。
 八百球と二ワトリ男が並んで座っている。
 八百球 …（ため息）
 二ワトリ男 …。
 八百球 せつねえなア…。
 二ワトリ男 …。
 八百球 …（ため息）

ニワトリ男 ……
八百球 何とか言えよ。
ニワトリ男 ……
八百球 ウンとかスンとか言ってみろってんだヨ！
ニワトリ男 ……
八百球 ……。宣子さんも宣子さんだよなア。旦那のことを待つつてあれほどキッパリ言つてたのによウ。女つてなあどう変わるかわかったもんじゃねえや。
ニワトリ男 人間なんてそんなもんだよ。
八百球 だけどまさかあの宣子さんが…。
ニワトリ男 おまえは女に幻想抱き過ぎだ。
八百球 うっう…。
ニワトリ男 ……。
八百球 コケーーーーッ！
ニワトリ男 ……。
八百球 そりゃあよう、戦争終わつてもう二年と半年、正直言やあ俺だつて、木村の旦那が生きて帰つてくるとは思つちやいねえよ。宣子さんだつて若いんだ。見切りをつける潮時つてもんがあらあ。
ニワトリ男 まあな。
八百球 だからつてな、よりによつておまえ、耶穌教なんか…。
ニワトリ男 別に入信したわけじゃないだろ。
八百球 だつて毎日毎日通つてんだろ？ その…教会によつ。
ニワトリ男 ……。
八百球 どうすんだおまえ、もし宣子さんが頭なんか丸めちゃつてよつ、アーメンソーマン冷やソーマンなんて言つちやつてよう、尼寺かなんかに行つちやつたらどうすんだよ！ くわー、なんてもつたいねえ。
ニワトリ男 だから入信したわけじゃない。ただ通つてるだけさ。
八百球 なんて通うんだよ。
ニワトリ男 おまえだつてここに通つてるだろ。
八百球 そりゃそうだけだよ…。
ニワトリ男 人間には、通う場所が必要なんだよ。
八百球 はあ？
ニワトリ男 見ろ。
八百球 ……なんだよ。
ニワトリ男 見られている。
八百球 ……。
ニワトリ男 どんな時でも。最後の最後まで。自分で自分を見ている。いつも自分に見られている。
八百球 な、なんにも見えねえよ…。
ニワトリ男 たとえ体が動かなくなつても、言葉を失つても、人間はここに通つてくるんだよ。それが人間なんだよ。
八百球 こつてどこだよ。誰が見てるつてんだよ。おい。
ニワトリ男 ……。

宣子登場。
教会の合唱曲が聞こえてくる。
見えない男に向かって、

宣子

あきらめたわけじゃないです、あの人のこと。でも今の私は、なにかがしたい。自分が生きていくということ、毎日を生きていくためにすること以外の何かをしたい。それだけです。あなたのように、世のため人のためにすべてを擲^{なげ}って生きていくことなんて、私にはとてもできないけれど、せめてこの戦争で傷ついた人たちを助けるお手伝いができれば…、あの人もわかってくれるんじゃないかって。偽善者かしら、私？ でもそうしたいんです。

ほら、この歌…。あなたとはじめて会った日にもこの歌が聞こえていた。何か救いがあればとこの教会に足を踏み入れて、でも別の救いを私をみつめました。ただ待っただけの毎日に疲れた私を救ってくれる人を。…いいえ、女がずるいんじゃないません。私がずるいんです。

宗教でも政治でもない、ただ愛情だけで人が暮らせる、そんな場所をあなたは作るうとしている。

わたしをつれていってくださいませんか？…月島さん。

暗転

A C T 4

幻想。
爺ふたり。ニワトリ男。

ニワトリ男 わかっただろ？

月島 ああ、わかった。

ニワトリ男 死んだと思っていた女房が生きていたとわかったときの木村常一郎の驚きが。

木村・月島 …（頷く）

ニワトリ男 ふたりに理想を追い求めていけると思っていた相手を失ったときの月島の胸の内が。

木村・月島 …（頷く）

ニワトリ男 自分たちをふたりの貫一になぞらえて、三十年後の常夜の月が変わらずに輝くことを約束したあの日のことを。

木村 思い出した…

月島 思い出したよ…

木村 宣子は…

月島 死んでしまったんじゃないなあ…

ニワトリ男 ああ。

木村 でも宣子はむしろとの約束を守ってくれた。

月島 おかげでわしらなんの未練もなく死ねる…

ニワトリ男 でもあなたたちはもうひとつ約束をした。

月島 …まきこ…

木村 まきこ…あの子か…そうか…

月島 あの子は…ひとりぼっちになってしまったんじゃない…あのとき…

木村 そうか…約束したなあの子と…

ニワトリ男 彼女が教えてくれるよ。もういちど。あなたがたが見失ってしまったものを。あなたがたに名前を与えてくれる…。

カーテン閉じる。

秋野登場。
飯田登場。

飯田 こんにちは。

秋野 …？ こ、こんにちは…

飯田 …。

秋野、警戒している。

飯田 憶えています？ 私のこと。

秋野 え？ いやあの…

飯田 あ、そうですか。それならいいんです。…秋野さん、ですよ。

秋野 え。

飯田 小田島麻紀子さんを、待っておられるんですね。
秋野 え、ど、どうして、それを

飯田 ああ、どうぞ落ち着いて。今ご説明しますから。
秋野 ……
飯田 あなたは小田島さんのあることを頼もつとしていらっしゃる。そのことを止める
権利は私にはもちろんありません。だがしかし。

秋野 ……
飯田 小田島さんがもしその話をすることを拒否したら、どうか無理強いないでやっ
ていただきたいのです。

秋野 いや、あの
飯田 私も今日は腹を決めてまいりました。どうか小田島さんとの話合いに同席させて
いただきたい。

秋野 ……あ、あの、あの、あなた、どちら様ですか…
飯田 ……

飯田、黄色いヘルメットを取り出してかぶる。

秋野 ……!

暗転。

愛の里、部屋。
カーテンは閉じている。足が見える。
男（飯田周平）登場。
カーテンの中に入る。
新田、吉沢登場。

吉沢 ホントなんです。一瞬正気に戻ったんですから。

新田 なんてその時名前聞かなかったのよ。

吉沢 うーん。

吉沢、足が三組見えてることに気がつく。

吉沢 ……。（新田に合図する）

新田 ……

吉沢、新田、一気にカーテンを引きあげる。

飯田 ……

新田 誰ですか！ あなたは！

飯田 ……いやあの…

新田 ここでなにしてるんです！ 警察呼びますよ！

飯田 け、警察です。

新田 は？

飯田 警察。

新田 ……

飯田、手帳を見せ、

飯田 埼玉県警、飯田周平と申します。どうもどうも。

新田 埼玉の警察が…なんで…

飯田 いやあの…実は警邏時代にですね、こちらの管区で捜査をやっておりまして。もう十五年前になりますが、当時わたくし二十歳の、まあかけだしのポリスマンだったわけでした。

新田 それで…どうしてここに…

飯田 実は、あの、今日は警察官としてではなく、飯田個人として来ております。

新田 だってなんかコンコンやってじゃないの。個人としてだったら不法侵入じゃない。飯田 はい。申し訳ない。そうならないためにもいろいろ工夫して、あの、このような…

飯田、黄色いヘルメットを出す。

吉沢 …あつ。

新田 えっ。

吉沢 この人！ この人！ あたしがみた人！

飯田 はい。見られました。

吉沢 ああ、黄色い帽子の…。

新田 じゃあ、ずっとこのビルのまわりを見張ってたってわけ？

飯田 いえいえこのビルというより…その…

飯田、写真をとりだし、渡す。

飯田 この人の行動を見守っております。

新田 …。(写真を受け取る)

吉沢 (のぞき込む)

新田 これ…

飯田 はい。

新田 小田島さん…。

飯田 こっちは僕がこちらで捜査をやっていた当時の彼女です。

新聞の切り抜きを出す。

吉沢 一家心中…。十歳の少女生き残る…。これが小田島さんなんですか？

飯田 最初に通報をうけて駆けつけたのがぼくだったんですよ。吐きました。父、母、弟、家族の死体の中でたった一人、瞬きもせずに放心状態の娘が、カラの薬の瓶の並んだテーブルの脚にもたれて座り込んでいた…。

麻紀子、秋野に伴われて登場。

麻紀子 それが私でした。

新田 小田島さん…！

飯田 …昇進して、埼玉県警に配属になって、驚きました。あのときの女の子と再会することになるとは…。で、僕は私的に彼女の生活を見守るようになったんです。

麻紀子 すみません。嘘をついていて…。最近、当時のことを思い出しても少しは冷静でいられるようになったんですよ。よく、遊んでもらったんです。おふたりに…。私、友達がいなくて、いつもひとり…。だからよく覚えていきます。

麻紀子、カーテンを引きあける。

麻紀子 お爺ちゃん、またきたわよ…。

爺たち、麻紀子を見返す。

麻紀子 いろんな話を聞きました。ときれときれにしか憶えていないけど、ふたりにはとても好きだった女の人がいて、その人が私によく似ているって。その人と、いつか一緒に暮らそうって約束したって。

飯田 皆さんのお話を陰ながら聞いていまして、自分も職務柄、少し調べました。いや…どちらか月島さんでどちらが木村さんかは、もちろんわかりませんが…。月島茂についての記録が警察に残っています。彼はこのビルを事務所にして、郊外に土地を求め、そこに本当の愛の里を作ろうと考えていたようです。ここに土地を買おうとした記録があります。買手は月島茂。売り手は…木村常一郎。

麻紀子 ああ、憶えています。木村のおじちゃんは、戦争のあと、養鶏所をやっていたんだって。今のような工場みたいな養鶏所じゃなくて、放し飼いに近いような…近代的な養鶏業に押されて商売がうまくいかなくなって土地を手放そうとして、たまたま土地を探していた月島さんに出会った。彼の事務所…このビルに来て…

そこで彼は…。

新田 お婆ちゃん…

吉沢 再会したんだ…。

飯田 その後、月島茂と木村常一郎の消息はどんな記録を見ても、出てきませんでした。今では誰も、彼らを見分けられない。

新田 小田島さん、でも、あなたは…

麻紀子 ええ、もちろんわかります。忘れるわけありません。だって、もし私がまたひとりぼっちになったら、おじちゃんたちのところに来ていって、約束してくださいから。

麻紀子、ひとりひとり指さしつつ

麻紀子 こっちが、月島のおじちゃん…。こっちが、木村のおじちゃんです…。

全員が、言葉なくふたりの老人を見守っている。

木村と月島は立ち上がる。

おそろくは、去っていく宣子の、後ろ姿を見ている。

木村 あやまらんでもいいよ宣子。木村という男はあの戦争で一度死んだんだ。だからあんたがそう思っても無理はない。いいから自分の決めたように生きればいい…。本当は、そう言ってやりたかった。

月島 本当はこう言ってやりたかった。愛の里はもう一度一から作り直した。宣子さん、あなたの気持ちひとつ満たしてやれない自分に、大勢の人間を救うことなご夢のまた夢だ。それをあんたから教えてもらった。

話しているうちに、ふたりの声が苦くなっていく。

木村 お互い、言いたいことが言えなかったな。

月島 ああ。

木村 責めるつもりはなかった。俺たちのうちのどちらも選べなかったことを…

月島 選べないさ。

木村 そうだな。

月島 けどあの人は約束してくれた。

木村 ああ。

月島 三十年後…楽しみがひとつだけできたってわけだ。

木村 さて…これからどうするね。

月島 俺はお尋ね者だからな。足跡をたどられんようにどこかに身をかくして…それから…風の吹くまま、気の向くままさ。あんたどうする。

木村 俺は…ニワトリどもをどこかに放してやらないとな。その後は…。

月島 どうする。

木村 あんたみたいな風来坊も面白そうだ。

月島 じゃあ、達者で。

木村 達者で。

木村、月島、退場。

残る全員が無言で、去っていく遠い過去を見送っている。

暗転

ACT 5

男（和泉孝）の登場。

部屋、カーテンがしまっている。
爺ふたりいる。
新田が花に水をやってたりしている。

和泉 あの一。こんにちは。

新田 はい？

和泉 あの、和泉と申しますけど…

新田 ああ。はい、聞いてますよ。いらっしやい。

秋野、登場

秋野 はあはあ…すみません、また遅刻してしまいました。

和泉 和泉です。

秋野 秋野です。遠いところをどうも…。

和泉 いえ…。それであの、うちのご先祖様っていうのは…

秋野 ええ、こちらです。

秋野、新田とふたりでカーテンを引きあける。

秋野 …こちらの方です。

和泉 …ふたりいますね…。

秋野 ええ。どちらかが木村常一郎さん、戦争に行っただけで行方不明になって、死んだと思われていた本家木村の最後のおひとりです。

和泉 どちらかが…って。どっちなんですか？

秋野 （新田に）どっちでしょう？

新田 …さあ。血縁の方でもわからないのに、他人の私たちには…ちょっと。ねえ。

秋野 そうですね。

和泉 え、いや、そんなこと言われても。

秋野 ですからですね、いちおう木村常一郎さんは見つけました。このとおり元気で…まあ頭はちょっと惚けておられますけど、元気でいらっしやいます。あとは、ご家族の方にお任せしたいと思います。どちらが木村さんは、私たちにはわかりません。

和泉 困ったな…。田舎のほうでは、生きてるもんなら是非つれて帰ってこいって言うてるんですけど…。これじゃ…。

秋野 田舎のご家族の方に聞いてみてはいかがでしょう？

和泉 いや…誰も顔なんてわかんないですよ。

新田 じゃあいつそのこと、ふたりとも連れて帰ってあげたら？ ねえ？

秋野 空気のいい田舎でのんびり余生を過ごす。いいかも。

和泉 いや、でもどっちかは赤の他人なんでしょ？

新田 お友達ですよ、古い古いお友達です。

和泉 お友達っていつてもなあ…。どうかなあ…。

秋野 よくお考えになって、決めてください。
和泉 わかりました。田舎の両親と相談してみますよ…。

秋野

ご足労ありがとうございました。

和泉、退場

秋野、新田、顔を見合わせる。

爺たち、「誰か」を見つけて、騒ぎだす。

新田 あら、また誰かきたの？

爺たち、不安そうな様子。

新田 ……だじょうぶよ。あたしたちには見えないけど、あれはね、きつと、若い頃の
お爺ちゃんたち自身なの。

爺たち、奇声をあげながらも、椅子に戻る。

秋野、会釈をして退場。

掃除をはじめ新田。

カーテンは閉じられる。

音楽とともに、
幕